

「ぎつと二十万円ぐらいはありそうだね。」

「いや、もつとありそうだ。きゃしゃなテエブルだった日には、つぶれてしまうくらいあるじゃないか。」

「なにしろたいした魔術をならったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたないうちに、岩崎や三井にも負けられないような金満家になってしまいうだろう。」

などと、口々にわたくしの魔術をほめそやしました。が、わたくしはやはりいすによりかかったまま、ゆうぜんと葉巻の煙をはいて、

「いや、ぼくの魔術というやつは、いったん欲心をおこしたら、二度と使うことができないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまったうちは、すぐにまたもとのだんろの中へほうりこんでしまおうと思っている。」

友人たちはわたくしの言葉をきくと、いいあわせたように、反対しはじめました。これだけの大金をもとの石炭にしてしまうのは、もったいない話だということです。が、わたくしはミスラ君に約束した手前もありますから、どうしてもだんろにほうりこむと、剛情に友人たちとあらそいました。すると、その友人たちの中でも、一番こうかつだという評判のあるのが、鼻の先で、せせらわらいながら、

「君はこの金貨をもとの石炭にしようという。ぼくたちはまたしたくないという。それじゃいつまでたつたところで、議論が干ないのはあたりまえだろう。そこでぼくが思うには、この金貨を元手にして、君がぼくたちとかるたをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするともなにするとも、自由に君がしまつするがいい。が、もしぼくたちが勝ったなら、金貨のままぼくたちへわたしたまえ。そうすればおたがいの申し分もたつて、しごく満足だろうじゃないか。」

それでもわたくしはまだ首をふって、ようにその申しだしにさんせいしようとはしませんでした。ところがその友人は、いよいよあざけるようなえみをうかべながら、わたくしとテエブルの上の金貨とをずるそうに、じろじろ見くらべて、

「君がぼくたちとかるたをしないのは、つまりその金貨をぼくたちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔女を使うために、欲心をすてたとかなんとかい、せつかくの君の決心もあやしくなってくるわけじゃないか。」

「いや、なにもぼくは、この金貨がおしいから石炭にするのじゃない。」

「それならかるたをやりたまえな。」

何度もこういう推問答をくりかえした後で、とうとうわたくしはその友人のことば通り、テエブルの上の金貨を元手に、どうしても、かるたを闘わせなければならぬはめにたちいました。もちろん友人たちはみな大よろこびで、すぐにランプを一組とりよせると、部屋のかたすみにあ